

里美の憂鬱

えいこ

ドアチャイムが鳴ったのは、私がちょうどシャワーを浴び終えて、冷蔵庫からよく冷えたペリエを取り出したところだった。玄関へと向かって歩きながら、直接ビンからぐびぐび飲んだ。柔らかくはじける炭酸の泡が、喉にシユワツと爽快な刺激を与えてくれる。

私はビンを手に持ったままドア越しに言った。

「はい。どなたですか？」

ドアの小さな覗き穴から覗いて見ると、隣に住む人見祥子（ひとみしょうこ）さんが立っていた。

「石岡先生、人見です。あの、パンを焼いたのでお持ちしましたけど」

上はまだ何も着ていなかった私は慌てた。

「ちよ、ちよっと待ってもらえますか。すぐ戻りますから」

「はい。すみません」

部屋に戻って、タンスの抽斗からTシャツを引っつかんで、急いで頭からかぶった。手がTシャツのあちこちにつかえて、なかなか外へ出てこなくてあせった。あわただしくTシャツを着終わると、スウェットパンツをジーンズに履き替え、もう一度玄関に戻った。

ドアチェーンをはずし、ドアを開けた。

「すみません、お待たせしました」

「いいえ、こちらこそ急におじゃましてすみません。今日は午前中にパン教室を開いたものですから、主婦の方がいっぱい来ていますね、すぐくうるさかったのではないかと気になっていました。お仕事のお邪魔になりませんでし

たかしら？」

「いや、別に気になりませんでしたよ。たまに笑い声が聞こえるくらいで、楽しそうでしたね。パン教室だったんですか」

「はい。それでね、お詫びに焼きたてのパンを持ってきましたの。どうぞ、召し上がってくださいね」

茶色のバスケットに、紺と白のギンガムチェックの布巾がかぶせてあり、中央がこんもりと盛り上がっている。

「へえ、焼きたてのパンですか。旨そうだな。いいんですか、いただいちゃって。ずいぶんたくさんありそうだな」

「どうぞ、どうぞ。たくさん焼いたので」

受け取ったバスケットから、ほんわりといい匂いがしてくる。

「人見さん、お急ぎじゃなければお茶でもいかがですか？ まだ起きたばかりで、何もありませんけど、紅茶なら淹れられますよ。せっかくだから、一緒にパン食べましょうか」

「まあ、よろしいのかしら？ 嬉しいわ。ちょうどお話ししたいこともありましたのよ。じゃ、おじゃましますね」

そう言ってサンダルを脱いで上がると、手早くサンダルの向きを変え、端に揃えてちょこんと置いた。

彼女はとても顔だちがよく、にっこりと笑ったときの表情がなんともいえず魅力的だ。そこだけぱっと花が咲いたように明るくなり、人をなごませる力を持っている。世間から置き忘れられたみたいな生活をしている私には、こんなふうに仕事とはまるで関係なしに訪ねてきてくれる彼女の存在は、とてもありがたい。

「どうぞ。散らかってますけど」

「いえいえ、とんでもない。男性の家があんまりきれいすぎると、世の中の女性たちは困ってしまうわ。散らかしておいてくださった方が、かえっていいのよ」

彼女にはソファを勧めて、私はキッチンへ行き、銀色のケトルに水を入れ、火にかけた。お湯が沸くのを待ってい

る間に、紅茶の葉っぱをティーポットに入れた。そして、ティーカップを2つ用意しながら声をかけた。

「人見さん、砂糖は？」

「いいえ、私はけっこうです。ストレートでいただきますから」

「ミルクもなしですか？」

「はい、なしで」

トレイに紅茶を淹れたティーカップをふたつ載せて、リビングに戻った。人見さんには砂糖なしのストリートティーを置いた。

「さつき、何か話があると書いてらしたと思いますけど？」

熱い紅茶をふうふうして冷ましながら、そろそろと啜っていた人見さんは、カップをテーブルに戻しながら言った。

「そうそう、それなんですよ。この間、桜木町で殺人事件がありましたでしょう。あの現場のマンション、今改築工事をしている私の家の近所なんですよ」

「へえ、そうなんですか。このところ締め切りに追われていたものですから、あまりニュースを見ていないんですよ。なんか近くだとは思ってたんですけどね。」

人見さんの知り合いだったんですか、その殺された人って。確か自宅で絞殺されたんですよ」

「私は、高橋さんとは直接の知り合いではありませんけど、あの家の隣に住んでいる林さんとは親しくしているんです。それでもうびつくりしちゃって。」

林さんの奥さんは、時々私のパン教室に来てくださるし、お嬢さんの加奈ちゃん、小学校の5年生ですが、加奈ちゃんも子供用にクッキーなんかのお菓子教室を開くと来てくれるんです。

それでね、さつきパン教室を開いたときも林さん来ていて、その話で持ちきりだったんですよ。桜木町の家を建て直すの間、私がおに仮住まいをしているものだから、少し場所が遠くなって、今日の教室は7人といつもより人数は少なかったんですけど、みんなご近所さんですからね、怖いわねーって話してたんですよ。特に林さんなどは隣ですしね、それはもうすごいショックを受けてらして、引越そうかなんて言ってたくらい。林さんのところの加奈ちゃんは、しょっちゅう高橋さんのところへ遊びにいらしたから、尚更ショックでしょうね。

加奈ちゃんってね、ちょっとお転婆さんな子で、マンションの二階なのにベランダの手すりに跨って、ほら馬乗りするみたいに、そうやってお隣と行き来してたんですよ。子供の発想ってすごいわね。

加奈ちゃんは一人っ子だから、高橋さんのところの綾ちゃんが可愛くてしょうがなかったみたい。綾ちゃんはまだ2歳なんですけどね。よく一緒に遊んでいたんですよ。お気の毒よね。綾ちゃんまだ2歳なのに、唯一の目撃者だなんて……」

一気にそこまで話すと、ふうとため息をひとつついて、お茶を飲んだ。

「2歳の女の子が目撃者なんですか？」

「そうなんです」

「それは心配ですね。その子、今どうしているんですか？」

「奥さんの実家が割と近いらしくて、お母さんが今は引き取っているそうですよ。綾ちゃんのこと心配ですけど、高橋さんのおじいちゃんのお世話もあるでしょうし、あの家はどうなっちゃうんでしょうね」

「亡くなったご主人のお父さんですか？」

「ええ、そうです」

「事件があったとき、その人どうしていたんでしょう？」

「よく解りませんが、去年の冬だったかしら、脳梗塞で倒れてから後遺症が残ってらっしゃるようですよ。家の中では壁や手すりに掴まって多少は歩けるようですが、右足に軽い片麻痺が残っていて、少し引きずるそうです。だから外へ出る時には、危ないから車椅子を使っているそうです。」

後遺症のせいか痴呆も少しあって、オムツを使っているそうですし、要介護4だと聞いています。警察が駆けつけた時はリビングの隣の部屋で、介護用のベッドで寝ていたそうですよ。

でもね、事件の後はシヨックのせいかどうか、ボケが進んじやったそうでね、誰に何を訊かれても、ほとんどお話しにならない状態なんですから。前はまだらボケだったから、話もできたそうですけど」

「まだらボケ？ そんなのがあるんですか？」

「ええ。ご存じなかったですか。完全にボケているわけじゃなくて、はつきりしている時と、駄目な時があって、そういう部分ボケのことをまだらボケと言っていますよ」

「ふうん。でも、何か知っている可能性はありそうですよね」

「そうだと思いますよねえ。高橋さんの奥さん、ずっと警察から帰してもらえないっていうから、お気の毒で。何かあったのか解りませんが、ご主人からずいぶん殴る蹴るの乱暴をされたそうだし、まあ、こんなことを言うのもなんですけど、暴力亭主だったのなら、殺されても自業自得ですよ。子供だっかわいそうだわ、そんなのが父親じゃ」

「暴力亭主だったんですか。ひどいな。で、警察に通報したのは誰なんですか？ 奥さんですか？」

「いえ、奥さんは意識がなかったそうです。お隣の林さんのご主人が通報したんですって」

「ああ、そうだったんですか。じゃあそのお隣の人、何か聞いたとか、見たこととかあるのではないですか？」

「それがね、奥さんとご主人はテレビでサッカーの試合を観ている、気がつかなかったんですって。高橋さんご夫妻は、よく夫婦喧嘩をしていたそうで、大きな声が聞こえるのは慣れっこになっていて、何か聞こえても、またかって思っ

て、あまり気にしていなかったとおっしゃるの。最初に何か変だっけ気がついたらのは加奈ちゃんだそうです。

自分の部屋にいた加奈ちゃんが、隣からすごい悲鳴とか、ものが壊れる音が聞こえて怖いと、テレビを観ている奥さんたちに言いに来たんですって。それで、奥さんたちが加奈ちゃんの部屋に行ってみたそうですけど、その時は何も聞こえなかったんですって。

でも加奈ちゃんがあんまり言うので、ご主人が加奈ちゃんの部屋のベランダから、お隣の部屋を覗いたら、カーテンが開いて、高橋さんの奥さんが仰向けに倒れていて、奥さんの腰のあたりに重なるみたいにして、ご主人が俯けに倒れているのが見えたんだそうです。

シヨックでしょうね。そんなの見ちゃったら、私なんて立ち直れそうにないわ。話を聞いているだけでも寒気がして、鳥肌が立つてくるもの」

両手を胸の前で交差して腕をぎゅっと抱くようにして、ぶるぶると震えながら肩をすくめた。

「そうですか。それじゃあ、確かに奥さんが疑われても仕方なさそうですね」

「ええ、そうなんですけどね。私は高橋さんの奥さんにはお会いしたことがないので、どういう方が解りませんが、林さんが言うには、絶対にそんなことができる人じゃないって。」

高橋さんの奥さんも、自分は殺してないと言っているそうですよ」

「そうですか。それじゃあ犯人は誰なんだろう」

「さあ？ だからみんな怖いって……」

その時電話が鳴った。

「すみません。ちょっと失礼します」

私は立ちあがって電話に出た。K出版社の担当編集者からだった。

「人見さん、ちょっと仕事の話があるので、すみませんね」
 受話器を片手で塞いでそう言ってから、私は自分の机の方へ行き、編集者が送ったというメールを開き、それを見ながら電話で話し続けた。

何ヶ月ぶりだろう、馬車道へ来るのは。こことこずつと仕事が忙しくて、おまけに来年受ける司法試験の勉強もしなくちゃいけないし、石岡先生のことを忘れていたわけではないけど、なんとなく優先順位が後の方になってしまっていた。

久しぶりにJRの関内で下りて、馬車道方面へと向かう信号を渡りながら、小さなタオルハンカチで額に噴き出した汗をぬぐった。冷房の効きすぎた電車と外の暑さとのギャップがあまりにも大きくて、身体がなじむまで少し時間がかかりそうだ。肩や腕など、露出した肌の表面は冷えたままなのに、額やうなじ、顎の下から胸にかけて、ハンカチで押さえるようにぬぐっても、次から次と汗がじつとりとにじんできてる。どうして車内をあんなに冷やす必要があるんだろう。あれじゃあまるで冷蔵庫じゃないの。たまらないわよ。

それにしても、土曜日には図書館など行くものではない。家で勉強するよりも集中できてはかどるだろうと、そう期待して行ったはいいけど、予想した以上に人が多くて閉口してしまった。

ああ、そうか、学生はもう夏休みに入ったのだ。自分自身ついこの間まで学生だったのに、日常の忙しさに追われているうちに、そんな季節感にもすっかり疎くなっていることに気がつき、なんとなく淋しさを感じた。

あゝあ、夏休みかあ……。

今年も夏休みが取れるだろうか。この分じゃ、たぶん無理だろう。休めたとしても、せいぜい週末をはさんだお盆の時期の3日間くらいに違いない。そう思うと、学生の頃がむしろ懐かしく思い出される。あの頃は、それでもけっこう忙しくしていたようなつもりでいたけれど、今から思えば、いつだって時間はたっぷりあったのだ。なんとも贅沢な時間の遣い方をしていたのだとあきれてしまう。

あ、先生にこれから行くって、電話するのを忘れていたわ。それとも、もうすぐマンションに着くし、このまま直接行ってしまってもいいかな。

どうしようかと迷ったが、やっぱり一応電話しておこうと思いなおし、片手でバッグの中をこそそこそとかき回した。二つ折りの薄っぺらい携帯電話を探し当て、歩きながら親指で短縮番号をプッシュした。

あら、話し中……。ま、いつか。行っちゃおうと。携帯をバッグに戻し、顔をさっと前に向けると、またもとの歩速に戻った。

もうすぐ1時になるところだ。たぶん先生はまだ食事をしていないだろう。そう思って、途中にあるドトールで二人分のホットサンドを買った。サーモンと海老がたっぷり入ったマヨネーズ味のシーフード・サンドと、ぷりぷりのポーク・レタス・ドッグ、それからヴォリユームたっぷり食べ応えのあるローストビーフと、生ハムのスパイシー・サンド。

一人でこれらのホットサンドを一度に食べることは無理でも、半分にカットして先生と分けるなら、3種類の味を楽しめる。そんなふうにして先生と一緒に食事をするのもずいぶん久しぶりのことで、この後に待っているはずの穏やかな時間を思うと、自然に表情も緩んでくる。

先生と過ごす時間は、ほかでの時と、時間の流れ方がまったく違う。そんなことも、学生時代には気づかなかったことのひとつだ。出来たてのほかほかのホットサンドが入った袋を抱えて、部屋に着いたらアイステイヤーを淹れようか、それともミルクティーにしようかと悩みながら、久しぶりに歩く馬車道の、どこかこじんまりとした街並みを楽しんだ。

マンションの階段を上り、部屋のベルを鳴らした。中からの返事を待っている間に、もう一度首筋や額の汗をぬぐった。マンシヨンの階段を上り、部屋のベルを鳴らした。中からの返事を待っている間に、もう一度首筋や額の汗をぬぐった。

「はい」という女性の声で、全身が凍りついた。返事とほぼ同時に開いたドアの隙間から、これまで一度たりとも想像したことのない顔が覗いた。瞬間、部屋を間違えたのかとも思ったが、いやそんなはずはない、とすぐに思いなおす。

「どちら様でしょうか？」

にっこりと笑いながら、見たことのない女が言った。

「えっ、あ、あの……」

別に悪いことをしたわけでもないのに、何故だかしどろもどろになってしまう。

いったい全体どうなっているんだろう。先生はどこ。どうしてこの人が出てくるんだろう。どちら様でしょうかですって？ それはこつちが訊きたいわよ。誰、この人？ 先生の玄関口で、まるで通せんぼするみたいに立ち塞がって、どうして私を中へ入れてくれないのよ……。

頭の中でいろいろな思いがぐるぐると回りだし、言葉が口から出てこない。しばらく来ないうち、いったい何があったのだろう。

「どうかなさったの？」

口もとに笑みを残しながら、少し首を傾げるように問いかけてくる様子が、悔しいけど、やけにきれいだ。大人の女と呼ぶに相応しい落ち着きと、品のよさを漂わせた見知らぬ人に、女としての完成度の高さを見せつけられたような気がして、一瞬のうちに嫉妬が芽生え、負けた、と思った。

「先生は……」

一言だけ、やっと言葉を口にすることができた。

「ごめんなさいね。今ね、先生電話中なの。先生に会いにいらしたの？ ファンの方かしら？ あなた、お名前はなんておっしゃるの？ 中に入ってお待ちになる？」

「ここへ来て、こんなふうに訊かれるなんて、それも知らない女から……。そんなこと、今まで一度だってなかったのに……。」

こんなことがあるとは思ってもみなかった私は、とっさにどうしてよいのか解らなくなってしまい、全身の血がすうっと引いていく。おまけに心臓までドキドキして、脇の下から汗が幾筋も、つつーと流れ落ちた。

「い、いえ。けっこうです。失礼しました」

それだけ言うのがやっとだった。

ホットサンドの紙袋を押しつけるように渡すと、私はその品のいい女から逃れるように、くるっと背を向け、急いでその場を離れた。

背後で、「ちよつと、あなた！」と呼びかける声を無視して、小走りになつて廊下を逃げた。

すると遠くで、鉄のドアが閉じられるかすかな金属的な音が聞こえ、胸の真ん中がきゅーつと痛くなつて、私は一気に階段を駆け下りた。

「どうしました？ 今、誰か来たようでしたね。もう帰つたんですか？」

電話の受話器を戻しながら、私は言った。

「ええ。若い女の子が一人来たんですけどね、何も言わないで帰っちゃいました。なんだか先生に差し入れに来たみたいですよ。まだ温かいわ」

紙袋を両手で差しだして、「ほら」と言つて人見さんは私に見せてくれた。

「ふうん。誰だろう。どんな子でした？ 名前は言つていませんでしたか？」

「訊ねてみたんですけど、何も言わなかったんですよ。なんだかずいぶん急いでいるみたいで、走つて帰りましたよ。せつかくここまで来たのなら、先生にお会いしていけばいいのにね。勇気を出して来てはみたものの、やっぱり恥かしくなったのかしら。かわいい子でしたよ」

「困つたな、誰だろう。お礼を言わなくちゃ。それ、ドトールの袋ですよね」

もつさりと膨らんだ紙袋を受け取つて近くでよく見ると、ドトールの馬車道店となつている。

「ああ、馬車道店だ。すぐそこで買ってきたようですね」

中を見ると、まだ温かいホットサンドが3つ入っていた。

「ん？ サーマンと海老のシーフード・サンドと、ポーク・レタス・ドッグと、ローストビーフと生ハムのスパイシー・サンド？ 3つの組み合わせに、なんとなく懐かしいような気分がした。覚えのある温かさが、遠くの方からかすかに頭をもたげてくる。最初は小さく、そして少しずつかたちを大きくしながら、気分は存在を主張しはじめた。

もしかして……。まさか……。そんなはずはないだろう。もしそうなら、何も言わずに帰つてしまふなんてあり得ない。

「ねえ人見さん。最近の若い女の子の間では、ドトールのサーモンと海老のシーフード・サンドと、ポーク・レタス・ドッグと、ローストビーフと生ハムのスパイシー・サンドが流行つているんでしょうかね？」

「え？ ドトールの、サーモンと海老のシーフード・サンドとポーク・レタス・ドッグと、えーと何でしたっけ、あ、そうだ、ローストビーフと生ハムのスパイシー・サンド……ですか？」

「ええそうです。流行りかな？ ほら少し前に、ティーなんてかや、パンなんてかいうのがすごく流行つたでしょう。あとほら、あれ、えーと、ああ、そうそう、ナタデココだ。これはよく食べましたねえ。コンビニで売っているヨー

グルトとか、ゼリーに入っていた。ああいうノリで、最近の流行りは、ドトールのサーモンと海老のシーフード・サンドと、ポーク・レタス・ドッグと、ローストビーフと生ハムのスパイシー・サンドになったのかなあ」

「はあ……それはもしかして、ティラミスとパンナコッタのことですか？」

「あ、そうそう、それぞれ。さすがに女性はそのういうことをよく知っていますね」

「いえいえ。でも、ドトールのサーモンと海老のシーフード・サンドと、ポーク・レタス・ドッグとローストビーフと生ハムのスパイシー・サンドが流行っているなんていうのは、全然聞かないですけどねえ……。私はてっきり石岡先生がお好きなのかと思いましたよ。それでさっきの女の子は、雑誌か何かでそれを見て、先生に差し入れにきたのだと思いました。違うんですか？」

「いや、好きですけどね。でも、特にそれが大好物で、雑誌やどこかにそんな話をしたという覚えはないなあ。御手洗ならともかく、ぼくがインタヴューで食べ物の好みを訊かれることなんてないですよ」

「そうなんですか。それじゃあ、その女の子は、自分の好物を先生に食べてもらいたいと思って、わざわざ差し入れにきたのかしら。そうなら、ちよつと変わった子ですよ。ファン心理というのは、いろいろなのですわね。こうして伺ってみると、人気作家さんというの莫名其妙な職業なのですわね」

「いや、ぼくなどはそんなことないですよ。芸能人ではないんですから。それに御手洗がいなくなつてからは、若い女の子が訪ねてくるなんてこともほとんどなくなりましたよ。プレゼントもめつかり少なくなつたし。バレンタインのチョコ攻めもなくなりましたしね。」

あ、そうそう、ずいぶん前に岡山で起きた事件で関つたのですけどね、里美ちゃんという女の子がいて、今は法律事務所勤めていて桜木町に住んでいますけど、彼女くらいですよこんなところに来てくれるのは……」

「まあ、先生ったら、そんなご謙遜をおっしゃつて……」

「あー……」

「ど、どうかさいますして、先生？ 急にどうなさつたの、そんな大きな声で……」

思い出したつ！ ドトールのサーモンと海老のシーフード・サンドとポーク・レタス・ドッグとローストビーフと生ハムのスパイシー・サンドは、里美ちゃんが以前よく買ってきてくれたのだ。いつも買う時にはどれにしようかとさんざん迷つて、だけど、どれかひとつに決めることができなくて、好きなホットサンドを3種類とも買ってしまふのだ。そう彼女はよく言っていた。

「センセー、半分こして食べましょーねー。一度にひとりですつは食べられないけどー、ふたりならイケちゃいますよねー」

そうだ。里美ちゃんだ。彼女の嬉しそうな顔や声を、今はつきりと思い出した。さつき訪ねてきたのは、里美ちゃんだ。そうに違いない。だが、どうして中に入つてこなかったのだろう。ずいぶん急いで走つて帰つたというから、忘れものでも思い出したか、急ぎの用事でも思い出したのだろうか。そうなら仕方ない。後で電話を試みようか……

「先生？」

「ああ、すみません。差し入れの主が解りましたよ。里美ちゃんです」

「まあ、そうでしたか。それはよかったですわ。お知り合いなら、お会いにならずにすぐに帰つてしまつて残念でしたわね。先生に直接お渡ししたかったですように。先生に声をかければよかったですね。ごめんなさい。気がきかなくて」

「いや、彼女なら大丈夫でしょう。たぶん忙しいんですよ。後で電話しておきます。彼女とはずいぶん会っていないかつたし、いつもなら電話をかけてから来るんですけどね、今日は電話もなかったし、彼女だとは気がつかなかった。仕方ないですよ」

だがここ何ヶ月かの間まったく音沙汰なしで、今日になって急に、それも連絡なしでいきなり訪ねてきた彼女の気まぐれに、少しばかりの抵抗感も感じて、今日の前にいる人の大人の女性らしい落ちつき、存在を強く主張するでもなく、しかし自然と匂い立つような品の良さ、そんなものを好ましいと感じている自分がここにいることも事実なただった。

悪いことをしたと、すっかりしょげ返ってしまっている人見さんが、気の毒なような気がしてきた。仕方がなかったと、人見さんをなぐさめながら、同時に、自分自身にも言い聞かせていた。いや、自分を納得させるために言ったという方が正しいかもしれない。すぐに気づいてやれなかった里美に対して、いくばくかの後ろめたさを残しながら、どうしたものかとホットサンドの紙袋を両手で持ったまま、小さくなっている人見さんを前に私は突っ立ったままでいた。

「ホットサンド、冷めてしまいますね。先生どうぞ召しあがってください。私がお持ちしたパンは、数日は大丈夫ですから。里美ちゃんの差し入れを先に召し上がった方がいいわ」

そう言われてみると確かに、ついさっきまで手の中で感じていたほんわかした心地よさが、少しずつ冷えはじめているのが解る。同時に、パンも心持ち硬くなってきたような気がする。

「そうですね。それじゃあ一緒に食べましょうか。ぼくひとりですつは、さすがに多すぎますから。このホットサンドのパンは大きいんですよ」

「よろしいのかしら。なんだか里美ちゃんに悪いみたい」

「帰ってしまったのなら仕方ないですよ。もし戻ってきたら、人見さんが焼いてきてくれたパンもあることだし、一緒に食べればいいでしょう。彼女も手作りのパンなら喜ぶんじゃないかな」

「そうだといいですけど……。それじゃあお言葉に甘えて、ご一緒させていただこうかしら。お茶を淹れましょうか」

久しぶりに訪ねてきてくれた彼女のことが、まったく気にならなかったわけではない。せっかくここまで来ていながら、中に入らず急いで帰らなくてはならなかった理由が何であったのか、それもあわせて頭の中に引っかかっていた。

真っ直ぐ家に帰ろうかとも思ったけれど、すぐには電車に乗る気がなくて、足が自然に山下公園の方へと向いて歩きだしていた。

なぜ逃げだしてしまったのだろう。ただ女の人がいたというだけなのに。いったいこの誰なのか、それを確かめてから帰っても遅くはなかったのに。外へ飛びだし、熱い陽射しに直撃されたら、ついさつき起こった心の動揺が、なんだかばかしく思えてきた。

どうしてあんなに心臓がばくばくしたのだろう。どうして脇の下からあんなに汗が流れてきたのだろう。あんなにとくらいで、こんなに強いストレス反応が起きるなんて、自分でも信じられなかった。

いやだ……。あたしが嫉妬だなんて……。

今まで私がいたところに、いつの間にか他の人がすり替わっていたような、それも私の知らない間に……。そう思うとやっぱりショックだった。

私が先生の恋人だったことは一度もないのに、そんな関係ではなかったけれど、でも私が一番近くにいられる存在だと、無意識のうちに確信してしまっていた。それが今はつきりと解った。

なんだか一番大切なものを失くしてしまっただけで、ぼっかりと心に穴が空いてしまい、無性に淋しさを感じた。ばかだ。あたしって、ばかだ。今頃になって気がつくなんて。いつも先生がそこにいてくれる、そうたかをくくっていた。別にあたしのために先生が存在するわけではないのに。いつの間にか、そんなふうに錯覚して、安心しきっていた。あたしって、なんてばかなんだろう。そう思ったら、涙が止まらなくなった。

土曜の午後の山下公園は、人と鳩でいっぱいだった。

空いているベンチを探したけれど、あいにくひとつもない。どこかすわって落ち着ける場所はないかと探しながら歩いているうちに、気づいたら港の見える丘公園まで来てしまっていた。ここにも人は多かつたけれど、山下公園の埠頭ほどではなかつたから、空いているベンチはすぐに見つかった。

海風が心地よく肌を撫でていく。陽射しに目を細め、額に手をかざしながら遠くの海を見渡した。できるだけ、ずーつと遠くの方を。気持ちいい。海はいいなあ。砂浜があれば最高！ そうしたら言うことなしなんだけどなあ。

どのくらいの間そうしていただろう。先ほどの刺すような陽射しも、わずかながら勢いが弱まってきている。風がひんやりと気持ちいい。この時期は陽の落ちる速度がゆっくりで、何だか得をした気分になる。ふと気づくと周囲にある街灯に灯かりが入っていた。

まだ明るいのに、もう灯かりが点くのね。と思ったその時、バッグの中でくもったように鳴る携帯の着信音が聞こえた。バッグの中をかき廻している間に、だんだん音がはっきりしてくる。携帯を手にとると、アンテナを伸ばし、ぱかんと開いて受信用のボタンを押した。

「はい。もしもし」

髪をかきあげながら言った。

「里美ちゃん、石岡です」

「先生……」

「さっき来てくれたの、里美ちゃんでしょう？」

「……はい。すみません、急におじやましたりして」

「そんなこと、もちろんいいよ。それより、久しぶりに来てくれたんだから、上がってくればよかったのに。差し入れ、どうもありがとう。おいしかったよ」

「ああ、いいえ……」

「どうしたの？ 何かあったの？」

「別に、どうもしませんけど……」

「元気ないみたいだね。今どこにいるの？」

どうしたのって訊かれたって、言えるわけじゃない。元気ないみたいだなんて言わないですよ。先生のわからない。ちん。

「里美ちゃん？」

「あ、はい。港の見える丘公園にいます」

「一人で？」

「はい」

「へえ、一人で何してるの？」

「海を見てるんですよ。港の見える丘公園にいるんだもの」

「ここを出てから、ずっとそこにいたの？」

「……ええ、まあ」

少しの沈黙があった。

「まだしばらくそこにいる？」

「え？ さあ、何も決めていませんけど」

「今から行くよ。そこで待ってられるかい？」

「……」

優しくしないでよ。今更……

「里美ちゃん？」

「はい」

知らず、声が小さくなっていった。

「そこで待ってて。行くから」

「いえ、いいんです。もう帰りますから」

「何か予定でも？」

「そういうわけじゃ……」

「せっかく来てくれたんだし、ぼくも久しぶりに里美ちゃんと話したいから、時間が大丈夫ならこれから会おうか？」

「先生のお仕事は？」

「大丈夫だよ。もう少しそこ、いられる？」

「いえ、ここはもう人が少なくなってきた、一人でずっといるのはちょっと怖いから、場所を変えてもいいですか」

「うん。どこがいいかな？」

「じゃあ山下公園の方で。氷川丸の近くの、鳩がたくさんいるあたり」

「わかった。すぐに行くから待ってて」

「はい」

「もし場所を変えなくなったら、動いてくれてかまわないからね。山下公園で里見ちゃんを見つけられなかったら、また携帯に電話するから。いい？」

「はい。わかりました」

「じゃあ、あとで」
切れた電話をしばらく見つめていた。気がつくとい私は息を停めていて、それでやおら、ふうーと大きく息を吐き出した。すると不思議なことに、肩の力も、それまでまとわりついていた不安の欠片も一緒に抜けていき、体が軽くなつた心地がした。

もういい。よそう。先生が来てくれたら、いつも通りにしよう。その方がいい。ベンチから腰を上げ、来た方向へ戻りはじめた。

山下公園に着くと、少し陽が翳りはじめていた。夏の陽射しも、西に傾く頃にはあっけなくその勢いを落としていく。こっちの方まで足を伸ばすのは久しぶりだ。海から吹いてくる風が気持ちよく、たまには馬車道から離れるのもいいものだなと思う。

氷川丸の方へ向かって歩いていくと、赤い靴を履いた女の子像の近くのベンチに、里美がしょんぼりとすわっているのが見えてきた。自然と急ぎ足になる。

「里美ちゃん、久しぶりだね！」

はっとしたような顔をこちらに向けて、彼女は私を見あげ、じっと見つめ返してくる。目がうるんでいるような気がして、どきっとした。泣いていたんだろうか……………。

「先生……………」

「待たせたね」

私は隣りにすわった。

「すみません。わざわざ来てもらって。お仕事の邪魔したんじゃないですか？」

俯いたままで言う彼女には、いつもの勢いのよさも、はじけるような明るさもなかった。

「どうしたの？ 何かあったのかい？ 何か相談？」

「いえ別に。私は元気です。話したいことはあつたけど……………」

しかしちつとも元気そうには見えない。

「話したいことって？」

「この間、桜木町で殺人事件があったんですけど、先生ニュース見ました？」

まったく思ってもみなかった方向の話題を持ちだされ、しかし私は、なぜか少しばかり安堵した。

「うん。でもこのところ締め切りに追われていたものだから、テレビも新聞もあまり見てないんだ。今日ちようどその話を隣の人が詳しく教えてもらったところだよ。まだ犯人は捕まっていないみたいだね」

「そうなんです。簡単そうに見えた事件だったんですけどね」

話しながら、里美はいくぶん元気を取り戻してきたようだ。さっきまでの蚊の泣くような声が、次第にいつもの調子に戻ってくる。ほっとした。元氣のない彼女は苦手だ。

「簡単そう？」

「はい、うちの事務所の人たちがそう……」

「君の事務所の人が？」

「殺された高橋雄太さんの奥さんのお母さんが、うちの事務所に依頼に来られたんですよ。警察、どうも奥さんを犯人だと思っっているみたいなんです」

「そうか。でも奥さんは、警察に発見された時は意識を失っていたんでしょ？ そんなふうには聞いたけど」

「そうなんです。でも玄関のドアには鍵がかかっていたし、ベランダの鍵は閉ってなかったようですが、5階建てマンションの2階なんです。ご主人、奥さんとは普段から喧嘩が絶えなかったそうですし、ご主人はアルコール依存症で、DVもあって、奥さんはいつも殴られていたらしくて、だから奥さんが思いあまって首を絞めて殺したんだらうって、警察はそう考えてます」

「それで、奥さんのお母さんが弁護を依頼してきたの？」

「はい。でも奥さんはやってないって。ずっと無実を主張してるんです。その時ご主人からひどい暴力を受けて、

自分は気絶してたって。だから何が起きたのかは自分では解らないって、奥さんはそう言っているそうです。

うちの担当の先生、嘘をついているようには見えないって、そう言っていました。殴られた痣や怪我の写真を見せてもらったけど、本当にすごいですよ。あんな暴力を日常的に受けていたら、確かに殺したくなくても仕方ないと思うけど」

「ふうん。じゃあ他に犯人がいるとしても、玄関に鍵がかかっていたなら、ベランダから入ったということ？ 2階ならそうむずかしいことではないよね。そのご主人、誰かに恨まれていたということは？ 確かご主人、消防士だったよね」

「はい消防士です。外での評判はいいんですよ。子煩悩だし。消防署でも評価は悪くないそうです。でも、非番の日は昼間からお酒を飲んでいられるらしいですけど。お酒を飲むと暴れて、暴力亭主になるみたいです。奥さん、お気の毒ですよ。それで奥さん、アルコール依存症の相談をするために、アラノンの会って入っていたそうです。消防士って、ストレスがすごく強いんですけどね。私も今回の事件ではじめて知ったんですけど」

「うん。聞いたことあるよそれ。彼らの仕事って、普段は訓練と待機で、何もなければ一番いいんだけど、いざ火事が起これば、時間も関係なしに駆けつけなければならぬ。そして現場はたいがい悲惨。亡くなった人がいなければいいけど、火の中に誰かいると解ついても助けられないこともある、目の前で燃えて死んでいく人を見ることもある、辛いよね。彼らの出番というのは、いつだって事が起きた後なんだ。何も無い普段とのギャップが激しいよね」

「そうなんです。それでストレスがものすごく強いから、お酒とか賭けごととか、覚せい剤とか女の人とか、いろんなことに逃げてしまう人が多いんですけど。日本はまだそういうところが遅れていて、組織として充分なケアができていなくて、自己管理になっているらしいです」

「里美ちゃん、ずいぶん勉強したんだね」

「はい。私が直接この件を担当しているわけじゃないけど、事件の背景というか、犯人を捕まえるには、やっぱり被害者のことをよく知っておかないといけないと思うし、現場がうちから近いし、なんか気になっちゃって、けっこう調べたんです」

「そうか。しばらく会わなかったけど、君もずいぶん頑張っていたんだね」

眼の前にいる彼女が、よく知っていた女の子から、大人へと成長していく過程に居合わせた気がして、なんだかやけに嬉しかった。

「で、事件としてはどうなの？　むずかしいのかな。その奥さんが犯人ではないという証明はできそうなの？」

「どうなんでしょうね。担当の先生は、奥さんが犯人ではないと思ってるけど、唯一の目撃者が2歳の娘さんだし。あとは他の部屋で寝ていたという要介護4のボケたおじいさんがいるだけで、これといって動機を持っていないような第三者が捜査線上に浮かんでこないんですよ。」

絞殺する時に使われたはずの紐状の凶器もまだ発見されてないし。首についている痕からすると、確かに背後から絞められたものだという鑑識からの報告はあるそうなので、奥さんの言うことも、信憑性がないわけじゃないんです。

はじめは簡単そうな事件で言われていたんですけど、結局はなんにも進んでいません。警察は奥さんが犯人だろうって、それしか考えられないって。で、もう1週間も拘留されているんですよ。それで先生にもお話を聞いてもらおうかって思ってた

「ふうん、そうだったんだ。悪かったね、すぐに気づかなくて。君が来てくれた時、ちょうど電話中だったものだから、人見さんに代わりに出てもらったんだ。彼女、3ヶ月ほど前に隣りに引っ越してきたんだ。家を改築するので、その間の仮住まいなんだって。君に紹介すればよかったね」

「いえ、別にいいんですけど……」

ひとみさん……もう名前で呼ぶほどに親しくなっていたんだ……

いや、そんなことを考えるのはもうよそうって、さっき決めたばかりじゃないの……

「里美ちゃん、お昼は食べたの？　もしかして、まだなんじゃない？」

「あ……、いえ、いいんです。別に、どうってことはないですから。食欲ないし」

「やっぱり変だよ里美ちゃん。これから食事に行こうよ。話はそれからゆっくり聴くから。ね？」

「なんでもないったら！　それに先生、もうお昼、食べたんですよ」

なんだか苛立っているような、手がつけられない様子に、私はたじろいだ。

「いずれにしてもどこか行こうよ。このままずっとここにいるも仕方がないだろう？」

私は立ちあがって、彼女の腕を掴んだ。そして、嫌がる彼女を無理やり立ちあがらせ、歩きはじめた。

「どこがいい？　久しぶりだし、君の行きたいところに行こう」

「……じゃあ、山手十番館」

観念したと見えて、小さな声で里美は言った。

「よし、行こうか」

その夜、私は里美ちゃんと人見さんから知り得た情報を、御手洗にもメールで知らせようとPCに向かった。できるだけ二人から聞いたまを詳細にと心がけてキーボードを打ちながら、自分の中でも整理してみたが、犯人は誰かと問われても、さっぱり解らなかつた。

動機と状況からすれば、やはり奥さんの高橋めぐみというところに落ち着きそう。しかし、いくらひどい暴力を受けていたとは言え、2歳のわが子が見ている前で、その父親を殺せるものだろうか。

そうならこういうことだ。妻のめぐみは夫の暴力から逃れ、夫の雄太の背後に廻り、後ろから紐状のもので首を絞め、息絶えたのを確認した後に紐状のものを始末する。それからリビングのベランダの、戸に近い場所で仰向けになり、うつぶせ状態の夫の身体を、自分の腰に重なるようにして置いた。そして警察が駆けつけるまで、気を失っているふりをした。

何のためにそんな面倒なことをする必要があつたのだろうか？ 普段からDVがあつたことはすぐに証明できるので、衝動的に殺してしまったのだとしても正当防衛が成立する、それに情状酌量の余地もあるのではないか、そう思ったということか？

凶器の紐とはいったい何を使つたのだろうか？ それは今どこにあるのだろうか？

もし妻の主張を信じるなら、夫から暴力を受けている最中に意識を失い、犯人はその後外部からやつてきたということだ。そして気を失っているめぐみを、なおも殴り続けている夫雄太を、背後から紐状のもので絞殺。凶器は持ったまま逃走。こういうことになる。

玄関のドアは内側から施錠がなされ、ベランダの戸の鍵は開いていた。犯人は何らかの方法で、マンション2階の

ベランダから侵入、そして逃走。もしそうであるなら、犯人はちょうどタイミングよくめぐみを助けにきて、そして去つたという話になるが。いったい誰だ？ めぐみには愛人説など出ていない。それとも、どこかにめぐみに好意をもっている者がいて、まだ捜査線上に浮かんできていない、というだけなのだろうか？

当日、マンション周辺に不信な者がいたという話も出ていない。そういう目撃談はないのだ。隣の部屋で寝ていた雄太の父雄一郎は、78歳のボケ老人だ。きつとも音は聞こえていたに違いないが、事情聴取ができない状態らしい。事件が起こる以前にはボケていない日もあり、会話は聞こえていたそうだが、事件後はショックから完全な痴呆状態に陥ってしまったらしい。まだらボケが、一夜にして完全な痴呆になるということが、実際にあるものなのだろうか？

考えるほど解らなくなり、妻めぐみの一人芝居という警察の主張に同意しなくなつてきた。その場合は、凶器として使われた紐状のものはまだ家の中にあるのではないか。整理がつかないまま、私は御手洗へメールを送信して、降参の気分で眠ってしまった。

どのくらい眠つたのだろうか。真つ暗な部屋の中で寝返りをうつた時、遠くで鳴る電話のベルを聞いた。もぞもぞとベッドから這いだし、まだ半分寝ている虚ろな気分で、ベルの鳴る方へと歩いていった。

受話器を耳にあけると、こっちはまだ何も言わないのに、はずんだ声が耳に飛び込んできた。

「石岡くん。楽しくやってるみたいだね！」

「御手洗。君か？」

「メール見たよ。2歳の子供のいるお母さんを、そんなに長く留置しておくなんてどうかしている。ミルクはどうするんだい。まだ母乳だつたら止まってしまうぜ」

「そんなことばくに言っても……」
「めぐみさんだっけ？ その人はDVの被害者なんだからね、早く帰してあげなくっちゃ」
「えっ？ じゃ、やっぱり犯人は他にいるんだね？ 誰なのか、君には解るのかい？」
「そりゃ解るさ」
「解るのか？！」

私は驚いて言った。

「石岡くん、事件の真相なんてものはね、いつだってシンプルなものなんだ。そこに舞台があるのなら、答えも必ず舞台にある。むずかしくしているものは、そこにあるものをちゃんと見ようとしないう人たちの目だ」

「ご高説はよく解った。答えを教えてください。誰が犯人なんだ？」

「言っても誰の利益にもならないな」

「でも、それじゃあ奥さんが犯人にされてしまうよ」

「ははん！」

「だから、早く教えてください」

「その前に確かめたいことがある」

「なんだい？」

「隣室で寝ていたというおじいさんは、前はまだらボケだったんだね？ そして事件を境に本格的な痴呆症になった。そうだね？」

「そうだよ」

「何を着てた？」

「え？ 誰がだい？」

「おじいさんだよ。事件当日、何を着ていたか解るかい？」

「さあ……？ そんなことは一度も話題に出なかつたなあ。それと何か関係があるのかい？」

「おむつをしていて、介護が必要なおじいさんが寝る時に着るものといったら、日本なら普通、浴衣みたいな着物なんだらう？」

「ああそうだな。たぶんそうだと思う。病院なんかでもみんなよく着てるよね。前開きの寝巻きを着るようになってよく言われるみたい。病気の種類にもよるんだらうけど、お年よりは、みんな浴衣を着るよね。えっ、ま、まさか……」

「では凶器はまだ家にある。老人の腰にね」

「だって、ボケているんだよ、彼は！」

「事件前はまだらボケだったんだらう？ 石岡くん、人間というものはね、どんなにボケていても、感情はあるんだ。君やぼくと同じようにね。楽しいことがあれば笑うし、ひどいやつが目の前にいれば怒りの感情も持つ」。

彼はいつもお嫁さんに世話してもらっていたんだらう？ おむつまで替えてもらって、そのよくできたお嫁さんが、アルコール依存症の自分の息子からいつもひどい暴力を受けていたなら、どんな気分になるだらうね。

事件の日も、隣の家にまで聞こえるような大きな悲鳴や、もの音がしていたんだらう？ 隣の部屋にはもつとよく聞こえるぜ。2歳の子だって怖がって泣いていただらう。そんな時、君なら知らん顔して寝ていられるかい？」

「でも、身体が不自由なんだよ」

「家の中は動けると、メールにはあつたじゃないか。軽い片麻痺はあるけど、壁や手すりを伝ってすり足で歩けると。最後の力を振り絞ったんだらう、彼の生涯、最後の力だ。78歳でも、男は死ぬまで男なんだよ」

「はあ……」

「それから石岡くん、痴呆というのはね、感情の起伏が大きく動くようなことがあると、症状がどんどん進むんだ。友達が亡くなるとか、引越したとか、それらが本人にとって大きな出来事なら、強いストレスとなって痴呆は進んでしまう。だから事件以来、完全な痴呆になったというのも頷けることなんだ」

私はため息をついた。

「そうか……、そういうことか。なんだかやりきれない事件だな。奥さんが釈放されるためには、おじいさんが犯人だという証明をしなくてはいけないのか……」

「いや、弁護士の仕事は犯人を挙げることにじゃない。奥さんが殺人を犯していないという証明をすればそれでいいのさ。凶器の紐が見つからなければ、犯人にとっては具合がいいよね」

「御手洗……」

「なんだい？」

「奥さんは、本当に気絶していて、何も見ていなかったんだろうか？ 君はどう思う？」

「さあね。そこまではぼくにも解らないし、述べた以上のことは言いたくない」

「うーん、その日もずいぶんひどい暴力を受けていたのは事実だし。殴られている最中におじいさんが来て、自分を助けるために息子を殺してしまったというのなら、やっぱりおじいさんをかばいたくなるだろうなあ」

「奥さんは気絶してたんだよ石岡君。どの時点で気を失ったのかは解らないけどね。ま、そんなことはいいじゃないか。犯人を指摘したところで痴呆の進んだ老人だ、裁判にはならないよ。そんなことより、お母さんを子供のところに帰してあげればいいんだ。そうだろう？」

「そうだね」

その後しばらく御手洗と雑談をしてから、私は電話を切った。

彼とこんなにゆっくりと話をするのは、ずいぶんと久しぶりのことだった。なんとなくまだ心もやのようなものが残ってはいたが、これから里美に電話をして、彼女にはすべてを話しておこうと思った。

それから2週間ほどが経ち、事件が無事解決したと、里美が報告にきてくれた。

その後の顛末などをゆっくり聞いてみると、ドアチャイムが鳴り、出てみると人見さんがにこして立っていた。

「短い間でしたけど、とてもお世話になりました。今日は引越しのご挨拶に来ましたの。またパンですけど、どうぞ召しあがってくださいな」

そう言って、いい匂いのする焼きたてのパンを、またどっさりとくれた。

「え、引越しなんですか。もう？」

「ええ、家の改築工事がやっと終わりました。ここからそんなに遠いわけじゃありませんもの、またいつでもいらしてくださいね。私でよければ、またいつでも英語をお教えますから。ウプサラの御手洗さんにお会いになったら、よろしくお伝えくださいね。私も、いつか御手洗さんにお会いしてみたいわ。ご帰国なさったら、ぜひ声をかけてくださいね。石岡先生のおかげでこちらにいる間、本当に楽しかったわ。どうもありがとうございます」

そう言って、手を差しだしてきた。

「こちらこそありがとうございます。お世話になりました。なんだか淋しくなりますね」

人見さんと、しっかりと握手をした。

「ええ私も。石岡先生もお元気で。それじゃ、失礼します」

深くお辞儀をし、頭を起すと、極上の笑顔でにっこりと笑った。そして、ゆっくりとドアを閉めた。

リビングに戻ると里美が立っていて、どう表現したらよいか解らないような複雑な顔をして、こちらを見ていた。

「どうしたの？」

「先生……」

「ん、何？」

「英語習っていたんですか？ 御手洗さんに会いにくために？」

「いや、まだはつきりとそう決めたわけじゃないけど。税関とか、飛行機の中とか、やっぱり少くらは話せないとまずいかなと思って。でもそうはいつても、英会話学校は、ちよつとね……」

「あの人、英語の先生だったんですか？」

「うん。たまたまね、タイミングがよかったんだ。あ、彼女、人見祥子さんと言っただけど、もともと英語の教師をしていたんだって」

「ひとみ、しようきさん……ですか……」

「そう。人見さんのご主人は今も海外に駐在していて、最初は家族みんなと一緒にご主人のところに行っていたそうだけど、もうすぐ日本に帰ってくるのが決まって、それで、家の建て直しをするのに彼女だけ一足先に帰ってきたんだって。高校生の娘さんがいてね、9月から日本の学校に転入するらしくて、工事がちょうど間に合ったって、喜んでいたよ……。あれ、里美ちゃんどうしたの？ なんで泣いてるの？」

「先生……ごめんなさい」

「なんだかよく解らないけど、いきなり抱きついてきて、声をあげて泣きだした。」

「急にどうしたの？」

「だってー」

泣きじゃくるばかりで、いっこうに訳が解らなかつたけど、とりあえず、こういう時には抱きしめてあげるのがい

いのかなと思った。しつかりとしがみついてくる彼女の長い髪からは、シャンプーの軽い香りがして、とても心地よく感じた。こういう場合は、やっぱり髪なんかも撫でてあげた方がいいのかもしれない、そつと柔らかな髪を撫でた。

いつまでも泣きやまない里美を抱きながら、これ以上どうしたらよいのだろうと途方にくれたまま、私は床の上に少しずつ伸びていく、自分たちの影を見ていた。

〈おしまい〉